

向き合うための力

北海道美唄高等学校
教諭 中村 典之
平成18年度採用
(聴覚障がい)

私は10歳頃水泳授業による中耳炎から、徐々に聴力を落とし、聴覚障害となりました。そんな私が教員を志したのは、大学2年生の頃です。将来の夢は、お恥ずかしい話ですが、バスケットボールでご飯が食べられたら...という甘い考えでしたが、バスケットボール界の厳しい現実を目のあたりにし、夢を追うより現実に目をむけ、一生バスケットボールに携われ、私が尊敬している恩師の影響もあり、教員を目指しました。私は、教育者として北海道の教育をこうしたい!こんな生徒を育成したい!と、考える時もありますが、バスケットボールの指導をして、そこから生徒の『心』の育成をしたいと考えています。部活や学校生活を通じての仲間や、先輩後輩といった縦や横の繋がりを大切に出来る『心の絆の教育』が私の目指しているものです。しかし、どのカテゴリーでも学生ですから本分は勉強です。勉強で発揮される集中力は全てに共通する集中力だと思っています。

では、実際に私の目標が実行できているのか?結論はまだ早いでしょうが、今現在ではまだ出来ていません。と、いうよりやれていないのが現実です。私自身、教育者としての資質、能力、経験が浅いから、という事もありますが、本気で生徒と向き合えていない気がします。生徒と言葉でのコミュニケーションではなく、『心を伝えるコミュニケーション』で生徒と接しなければと思っています。

私は以前、聴覚障害者のバスケットボール日本代表に選出されていました。そこで、『Heart Beat』と言うチームコンセプトの元、世界大会に参加しました。聴覚障害者は聞き取る事以外に、言葉を発する事にも健常の方から比べると劣る所があります。当時の監督が、心で会話しよう!見ている人に心が伝わる試合をしよう!という意味が『Heart Beat』という言葉に含まれていました。健常・障害を区別するつもりはありませんが、私なりに健常の世界と障害の世界を経験した上で感じた事は、障害を持つ方の方が、人に心を伝える能力に長けている事を強く感じました。上手に伝える事よりも、自分の心を素直にぶつけてくる事を強く感じる事があります。だからという訳ではありませんが、子どもたちに『心を伝えるコミュニケーション』が出来る皆様方の力を教育の現場で発揮していただきたいと思います。障害にも様々あります。教育を受ける子どもたちも様々です。皆様方も沢山のご苦労をされたと思います。その経験は必ず教育現場で、子どもたちにとっても良い経験になりますし、励みにもなります。私自身が今誰かの励みであったり、誰かの為に役立っているかは分かりません。その答えは社会に出た教え子達が頑張っている姿を見た時に初めて答えが出る物だと思っています。また、私は初任校の大変お世話になった体育の先生方に常に、生徒とよく会話をしなさいと言われました。その先生方の教えを元に私は今、頑張っています。

最後にこの文章を読んでいただき、障害を持つ方が、教員を目指していただけたら、嬉しく思います。